

小諸市教育委員会

文部科学省では、次の目的で小学校第 6 学年、中学校第 3 学年、原則として全児童生徒を対象に「全国学力・学習状況調査」を毎年実施しています。

- ・義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- ・そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。
- ・学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。

今年度は小学校の国語と算数、中学校の国語、数学で実施されました。基礎知識を問う A 問題と、知識の活用力を問う B 問題からなっています。

以下は、小諸市内小中学校の全体的な傾向ですので、どの学校にもそのまま当てはまるものではありませんが、各校が自校の課題や改善策をより明確化するための一助としています。

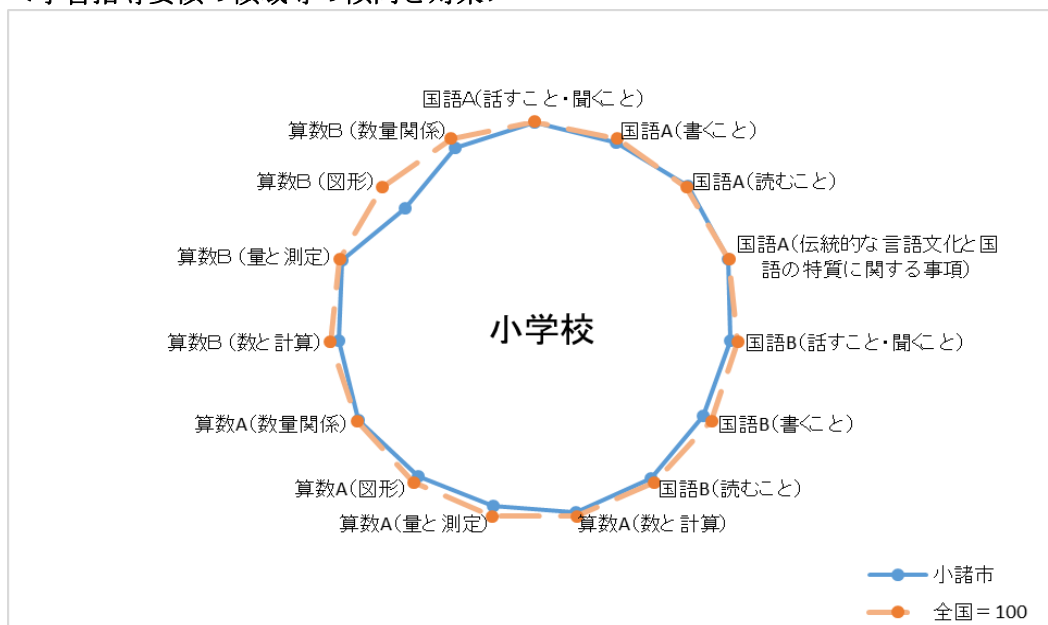
(1) 小諸市内小中学校の学習指導要領の領域等の平均正答率の状況

【小学校】

<A・B 問題の全体的な傾向>

- ・各教科の平均正答率は全国と比べて、国語は、A 問題はほぼ同じで、B 問題はやや下回りました。また、算数は、A 問題がやや下回り、B 問題はほぼ同じでした。

<学習指導要領の領域等の傾向と対策>



学習指導要領の領域等の平均正答率をみると、国語では A・B 問題ともすべての領域でほぼ同じ値になっています。A 問題の「読むこと」では、全国の平均正答率を上回りました。B 問題では、全領域で少しずつ低い値を示していることから、自分のもっている知識を最後まであきらめずに活用して課題を解決する力を培う必要があります。

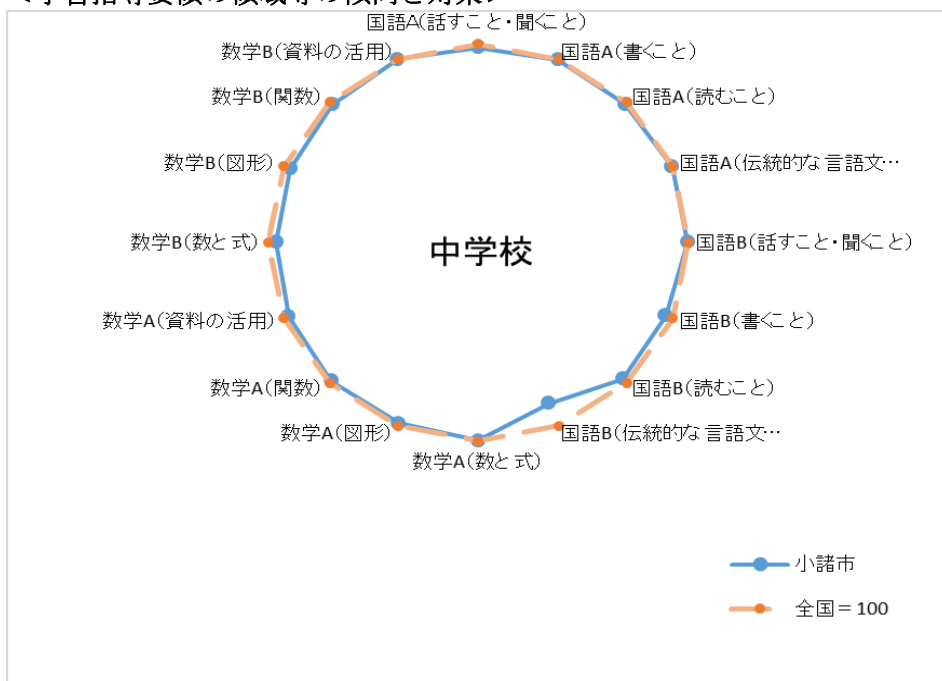
一方、算数で特徴的なことは、「図形」の領域で、A 問題では全国平均と比べてほぼ同じですが、B 問題では、やや課題がありました。このことから、数学的な操作活動を通して数学的な見方・考え方の育成が必要になっていると考えられます。

【中学校】

＜A・B問題の全体的な傾向＞

・各教科の平均正答率は全国と比べて、国語、数学のA・B問題ともすべてがほぼ同じでした。

＜学習指導要領の領域等の傾向と対策＞

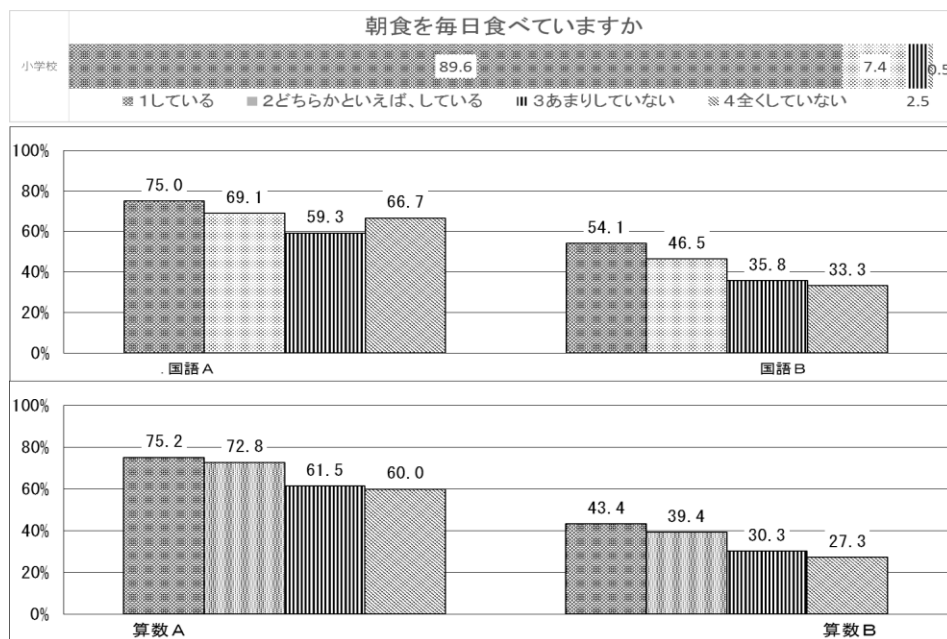


学習指導要領の領域等の平均正答率をみると、ほぼすべての領域で同じかやや下回る数値になっています。しかし、国語のB問題で「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が下回っています。これは、対象問題が1問ですので、A問題（対象問題18問）での同じ領域では全国平均正答率と同じであることを考慮する必要があります。

国語、数学共にB問題がやや低いということは、その理由として「長い問題文に抵抗がある」「文章や図、グラフなどから問題設定を理解して、示された課題を解決することに抵抗がある」「どの知識を活用するか判断に迷う」「自分の考えを書くことに抵抗がある」といったことが考えられます。

(2) クロス集計の状況（児童生徒の生活の様子と平均正答率の関係）

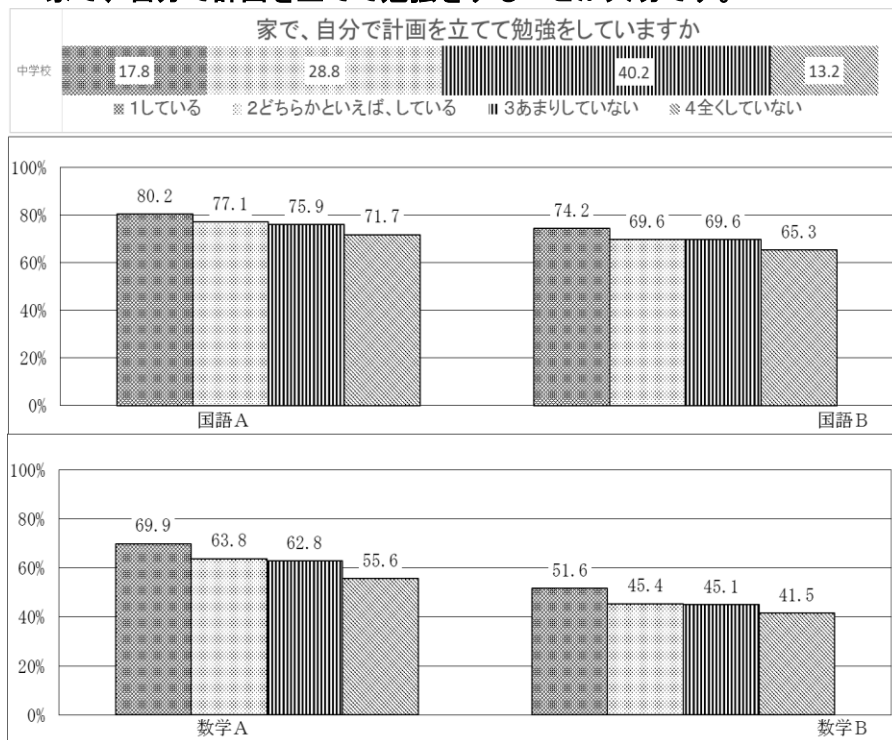
* 朝食を毎日食べることは学力向上の要素の一つです。



「朝食を毎日食べていますか」の質問に対して90%近くの小学生が「食べている」と回答しています。中学生では残念ながら約85%に落ちていきます。

選択した項目と各教科の平均正答率の関係を示したものが、下の棒グラフです。国語・算数共にA問題については関係性が低いですが、B問題については、「全く食べていない」と「毎日食べている」の差が、国語で20.8ポイント、算数で16.1ポイントになっています。中学生では、この差が更に大きくなっています。

***家で、自分で計画を立てて勉強をすることが大切です。**

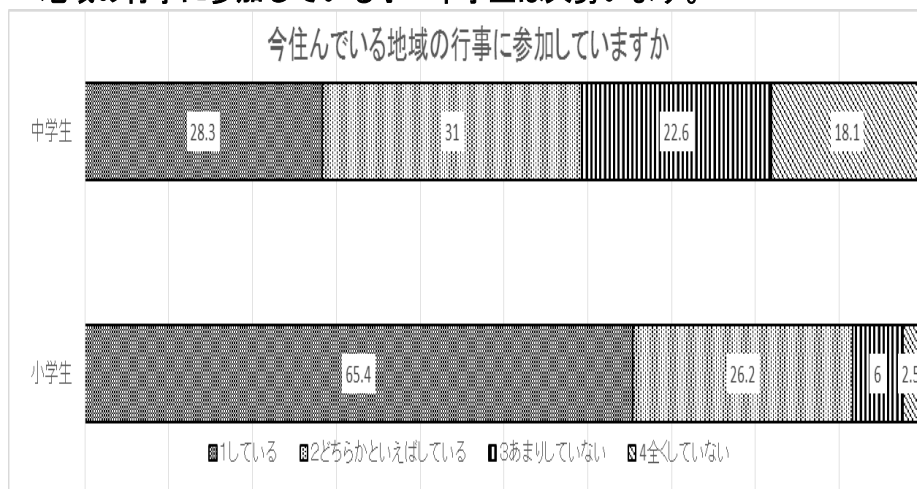


この質問で大切なことは、「自分で考えて（計画を立てて）勉強をしているかどうか」ということです。

「あまりしていない」「全くしていない」と回答した中学生が50%以上いました。小学生では、約35%でした。当然なことながら、平均正答率はすべての教科で右肩下がりになっています。特に数学のA問題で顕著な傾向があります。また、知識の活用をねらいとするB問題が低いのは、自分で考える機会が少ないとも言えます。

自分にとって必要な学習は何かを考え、計画を立てて学習に取り組む子どもの育成を、学校、家庭、地域が連携して行う必要があります。

***地域の行事に参加している小・中学生は大勢います。**



*この質問での、平均正答率との関係は示していません。

この質問に対して、90%以上の小学生が「している」「どちらかといえばしている」と答えています。この数値は全国平均を30%近くも上回っています。中学生の同じ回答は約60%ですが、これも全国平均を20%以上上回っています。

この高い数値は、長野県の特徴であり、子ども

は地域の宝」「地域で子どもを育てる」という気風を今後も大切にしていきたいと考えます。

しかし、上のグラフのように、中学生になると地域の行事に参加する子どもが約30%減ってしまい、全く参加しない者が20%近くいるのが現実です。

中学生が、地域や社会で起こっている問題や出来事に関心をもったり、地域や社会をよくするために何をすべきか考えたり、地域社会などでボランティア活動に参加したりする環境を更に整えていく必要があります。

(3) 学力向上への課題や改善策を各学校や地域等で考える

全国学力・学習状況調査の結果は年度によって多少の違いがあります。年度によって、子ども達の実態や状況に違いがあるからです。しかし、具体的に示された数値は真摯に受け止め、学校での授業改善や地域社会での子ども達への支援の在り方に生かしていきたいと考えています。

なお、形式は違いますが、各小・中学校からも学校ごとの結果をお知らせいたしますので、参考にしてください。